歓声を、ありがとう。 JRA 60th Anniversary

# 古井由吉

（『優駿』JRA60周年記念特別連載より） 競馬 人間交差点

第８回

# 高橋源一郎

20年以上も前になるが、古井由吉と競馬場で遊んだときのことは、高橋源一郎にはなつかしく、たのしかった記憶として残っている。夏の函館でも平日の川崎でも馬券は負け、そのまま酒になった。

高橋にとって古井は尊敬する作家のひとりである。しかし、競馬のときの古井はぐだぐだと馬券を買い、ぐだぐだと酒を飲んだ。ぜんぜん文学的でない。小説は「神」なのに、競馬ではどこにでもいる「おやじ」だった。その落差がすてきすぎる、と高橋は言う。

古井に言わせると競馬場は「からかわれに行くところ」であり「いたぶられに行くところ」である。自分がいかに判断力がないか、いかにものを見る目がないか、馬券を買うたびに悟らされる。つねに現実の結果に背かれている自分を見せられると、どうしても傲慢にはなれないんですね、と古井は言う。その結果、競馬が終わると、一流文学者とは思えない風情でぐだぐだと酒を飲んでいる。

古井由吉が競馬をはじめたのは67年の夏、妻の実家に近い福島競馬場だった。このときにビギナーズラックにありついて以来、競馬から離れていない。70年発表の「杳子」で芥川賞を受賞したころから本格的な競馬場通いもはじまり、競馬は月に一回程度、土曜日に府中や中山に行った。

はじめて競馬の原稿を書いたのは74年の『優駿』で、ダービーの観戦記だった。以来、『優駿』にたびたび寄稿するようになり、85年にはじまった連載エッセイはいまもつづいている。川端賞を受賞した「中山坂」など競馬にまつわる作品も書き、競馬好きの作家として知られるようになっていた。

高橋源一郎の競馬はハイセイコーの弥生賞を偶然テレビで見たことからはじまる。学生運動に明け暮れて大学を除籍となり、肉体労働で生活していたころだった。そしてダービーでハイセイコーが3着に負けたことに刺激を受け、競馬に傾倒していく。

81年に作家デビューした高橋が一躍脚光を浴びたのは88年、『優雅で感傷的な日本野球』で第1回三島賞を受賞したときだった。取材記者に「賞金を全額ダービーのメジロアルダンの単勝につぎ込む」と口走ってしまったのだ。

メジロアルダンはクビ差2着に負けたが、これがきっかけで競馬の仕事をするようになる。『サンケイスポーツ』では現在もつづく連載予想コラムがはじまり、雑誌には競馬の原稿を次々に発表し、テレビのスポーツニュースや競馬中継にも出演した。さらに海外の競馬や牧場に頻繁に出かけるなど、競馬が本業のようになっていた。

しかし、そんな怒濤の競馬生活に疲れを感じた高橋は「ファンは柵の向こう側に行ってはだめだ」と悟り、本業を優先するようになった。現在では競馬場に行くのはダービーと有馬記念ぐらいになり、古井とは朗読会や文芸誌の鼎談などで顔を合わせるが、一緒に競馬に行くこともなくなった。

現代日本文学の最高峰とまで評される古井由吉は76歳のいまも創作意欲は衰えない。そんな古井を「無事是名馬」と称え、80年代にはポストモダン文学の旗手として突っ走ってきた高橋も、気がつけば、ぐだぐだと酒を飲んでいた古井の年齢を超えていた。

（文・江面弘也）

*Yoshikichi Furui*

T.Nishihara

古井由吉(ふるい・よしきち)
1937年東京生まれ。東京大学文学部独文科卒業。同大学院修士課程修了。金沢大学の助手、講師を経て、70年まで立教大学助教授を務める。同年の発表作『杳子』で芥川賞を受賞したのをはじめ、数々の文学賞を受賞。97年に『白髪の唄』で毎日芸術賞を受賞した以降は、文学賞を辞退している。86年から2004年までは芥川賞の選考委員も務めた。12年には第８巻におよぶ自撰作品集が発刊された。

*Genichiro Takahashi*

K.Yamamoto

高橋源一郎(たかはし・げんいちろう)
1951年広島県生まれ。横浜国立大学除籍。81年に『さようなら、ギャングたち』で群像新人長編小説賞優秀賞を受賞し作家デビュー。88年には『優雅で感傷的な日本野球』で三島由紀夫賞を受賞した。同年11月より、現在もサンケイスポーツ紙上で連載が続いている競馬予想コラム「こんなにはずれちゃダメかしら」がスタートした。2005年には明治学院大学国際学部教授に就任している。

**時代の名馬**

## グランドマーチス

1971年にデビューし、日本中がハイセイコーで沸きはじめた73年に障害入り。中山大障害(当時は春、秋の開催)４連覇などの成績を残し、７歳まで現役を続けた。障害競走で活躍した馬としては唯一、顕彰馬に選ばれている。

※当欄は『優駿』８月号「競馬人間交差点」第８回のダイジェスト版です。